

古典インド思想における言葉と人間

藤井隆道（京都女子大学）

インドの古典思想は、現存する文献に即してみるかぎり、輪廻の観念を前提とし、解脱などといった救済を志向する体系として成立している。これらの救済目標は、人の目的（*puruṣārtha*）として提示されており、実際には、教示を学び実践する主体として人間こそが想定されているとみられる。とはいっても、人間と他の生類を区別する思考法が議論の前面に出てくることは稀であり、その相違に考察を与えるまとまった論題が立てられることもあまりない。たとえば西洋の知の伝統のなかで人間と他の動物とを区別する原理としてしばしば言及される「理性」に対応する術語を、古典インドの議論のなかに見出すことは困難と思われる。

一方で、西洋の思想伝統では古くより、言葉との関わりから人間の本性を捉える見方も存在する。人間と他の動物との相違を、言葉を持つという事実に求めたアリストテレスをはじめ、人間は、種に固有の生得的なメカニズムにより言語を獲得するとしたチョムスキーにいたるまで、両者の密接な結びつきは意識され、時に明示的に論じられている。ところで周知の通り、古代インドでは、他の文化圏に類をみないような詳細な仕方でも、言語に対する探求が行われてきた。そこで本発表では、言語と人間性の関わりを取り上げて、インドの古典思想における人間観の一端を解明したいと考える。

インドにおいてはまず、ヴェーダ聖典解釈や、サンスクリット正語の文法を規定しようとする学的伝統のなかで、精緻な言語分析の技術が発達し、それらを踏まえたうえで、言葉やその意味の本性を問う一般的考察がなされるようになる。また「ダルマ」を教示する聖典の価値・権威をめぐる聖典論の議論が展開されるとともに、より一般的に、知識の根拠の一つの種別として言葉について論じるという議論の枠組みが整備されて、様々な学派に共有される、言葉をめぐる議論領域が成立している。

人間論の観点から興味深い事実は、このインド言語論の展開過程で、言葉と人間との関わりが、ある程度明示的に問題とされてきたということである。たとえば、言葉やその意味との関係は人が作り出したものであるのか、聖典はいかなる仕方でも成立し、また人にとって有意義な事柄を教示するのか、知識の根拠として言葉はどのようにして定式化されるか、などの論点をめぐり議論が蓄積されており、言語という営みへの人間の関与の仕方やその度合いは、インドの言語論において、大きな関心事であったことが分かる。しかし、なぜそうだったのだろうか。本発表では、言葉と人間の関わりがいかに関わられてきたのか、諸議論を検討しつつ、その背景にある人間存在についての洞察を明らかにできればと考えている。

キーワード：古典インド思想，言葉（*śabda*），人為性